

第28回結核予防関係婦人団体中央講習会 お言葉



令和6年2月7日（水）

はじめに、この度の令和6年能登半島地震により被災された方々へ心よりお見舞いを申し上げますとともに、亡くなられた方々に哀悼の意を表します。

この中央講習会には、被災地から参加されている方々がいらっしゃると思いましたが、また被災された方々の心身の健康を、そして生活を案じている方々もいらっしゃると思います。被災された方々が安心して暮らすことができるようになりますことを願っております。

本日、「第28回結核予防関係婦人団体中央講習会」の開講式にあたり、全国より集われた皆さまにお会いできましたことを大変うれしく思います。

これまで長きにわたり、全国の結核予防婦人会は結核予防について、普及啓発活動、検診奨励、複十字シール運動など、きめ細やかに力を尽くしてこられました。皆さまをはじめ多くの関係者の努力により、2022年には、日本の結核罹患率は、(人口10万対) 8.2となりました。前年に引き続き、罹患率が10.0未満とする「低まん延国」の水準を達成しています。

しかし、今でも年間1万人以上が新たに結核患者として登録され、1600人以上が命を落としております。そのため、3年前に、厚生労働省や結核予防会など関係団体が改定した「ストップ結核ジャパンアクションプラン」では、2025年までに罹患率を7とすることを目標として、高齢者や外国出生者など結核に罹患するリスクの高い人々に対する対策の強化や結核菌に感染している人の発病を予防する治療の推進などの活動がおこなわれています。

一方、WHO（世界保健機関）の報告によれば、世界では、2022年の1年間に約1060万人が結核に罹患し、約130万人が結核によって亡くなりました。SDGs（国連持続可能開発目標）の保健分野での目標の一つは、203

0年までに結核蔓延を終息させることです。この目標達成に向けて、日本の結核対策に携わる関係者みながこれまでの経験を活かして積極的に貢献していくことが求められています。

婦人会が進めている「複十字シール運動」による募金は、国際協力にも役立てられており、その理解を深めるために、婦人会はカンボジア結核対策スタディツアーをおこなってきました。しばらくコロナ禍により中断していましたが、昨年12月に、4年ぶりに再開しました。今回のツアーでは、カンボジア滞在中に、結核のモバイル健診の見学をしたり、国立結核センターの病院とヘルスセンターを訪れて、カンボジアの結核予防会の取り組みや結核対策について説明を受けられたりしました。複十字シール運動が、このようにカンボジアをはじめ、他のアジアやアフリカの国々での結核予防活動を支えていることを、大変ありがたく思っております。

暦の上では春を迎えましたが、まだ寒い日が続いています。冷え込んだり、寒さが和らいだりするこの時節を、どうぞご体調に気をつけてお過ごしくださいように。

そして、本日と明日におこなわれる感染症や呼吸器疾患などについて深く学べる講演や、参加者がお互いの話に傾聴し、寄り添う経験を大切にする情報交換会の場が、今後の皆さまの活動に少しでもお役に立つ機会となりますことを願い、開講式に寄せる言葉といたします。